

主催… 県立神奈川近代文学館 / (公財) 神奈川文学振興会
後援… 月刊『望星』

小島ゆかり ◎歌人

辻原登 ◎作家

長谷川權 ◎俳人

半歌仙 『てつぺんの柿の巻』



昨年十一月二十三日に神奈川近代文学館で開かれた「かなぶん連句会」は、三人の選者が作った六句に続く句を参加者が考え、半歌仙の連句を完成させるという創作の催し。参加者が一体となって楽しんだ当日の模様をレポートする。

座の集いから生まれる連句の醍醐味

小島 今年も、この連句会で皆さんと会えて本当に嬉しく思います。

今回私は、発句担当で秋の句でした。てつぺんになっている柿の実を見るたびに、あの柿は風に吹かれ、雨に濡れ、鳥につつかれ、ダイナミックかつスリルでときめきもあるだろうと思うのです。慎ましく上品な老婦人がそれを眺めて、内心「あの柿になりたい」と思っていたら面白いだろうと思い、「てつぺんの柿になりたき老婦人」と詠みました。

辻原 脇は秋の句です。老婦人ときたので、気品のある老婦人から百舌に飛ぼうと思いました。百舌はカエルなどを捕まえ、木の枝につるし乾燥させて食べます。そこで、老婦人の貴婦人らしさを取り去り、からからにしてしまったらどうか。百舌はきつと食べないけれど、目玉だけは美味しいだろうと考え、「眼球くはへて百舌は飛び去る」としました。

長谷川 脇の句は、眼球が何かにぶら下がっていて、百舌がくわえて飛び去るといふ、ある種凄まじい光景

半歌仙『てつぺんの柿の巻』

【初折の裏】

- 発句 てつぺんの柿になりたき老婦人 ゆかり(秋)
- 脇 眼球くはへて百舌は飛び去る 登(秋)
- 第三 荒涼たる核の地獄を月照らす 權(秋月)
- 四 トロッコに乗る猫と少年 ゆかり(雑)
- 五 見て来たぞブラックホールに架かる虹 登(夏)
- 六 今季百号大ホームラン 權(雑)

【初折の裏】

- 七 ポンペイの石を台座に白虎隊 迪靖(雑)
- 八 鶴のダンスは木枯しを呼ぶ 明日檜(冬)
- 九 追ひかけて渡すマフラー朝の道 克子(冬)
- 十 この口紅は私のじやない 珠江(雑)
- 十一 バンドマンやめて秋田に帰省する 登紀和(夏)
- 十二 夏の月夜に乳房が二つ 新(夏月)
- 十三 徘徊の母連れ戻す車椅子 忠子(雑)
- 十四 真白き紐のバスケットシューズ まきぬ(雑)
- 十五 コンタクト這いずり探す歌舞伎町 新(雑)
- 十六 一年生は大声で泣く 季(春)
- 十七 花は降るとんな人にも限りなく 深咲(春花)
- 折端 雲雀は高く高く囀る 道子(春)

です。けれど、核爆弾が落ちた後の映画の光景など、どこかで似た景色を見たことがある。その風景を、第三で「荒涼たる核の地獄を月照らす」と詠みました。小島 私のおふくよかな発句を、お二人が悲惨な方向へ持っていくてしまいました(笑)。核の地獄とあるこの句を見て思い出したのは、レイ・ブラッドベリの短編『休暇』です。自分たちの家族以外、人類が消滅してしまった地球を、トロッコに乗ってあちこち巡るお話なのですが、ここではトロッコに少年を乗せました。少年の場合、犬が相棒のことが多いけれど、ここでは猫にして「トロッコに乗る猫と少年」。さあ、旅はどうなっていくでしょうか。

辻原 このトロッコを地球から逃れる宇宙船とイメージしました。SF映画『インターステラー』は、主人公の女性の父親は、地球から移住できる星を探しに行つたまま帰ってこないという話です。映画の中で、このお父さんがブラックホールに飛び込むと、娘の部屋の書棚の裏に出てきてしまうのですが、僕がブラックホールに飛び込むとしたら、虹を見てみたいと思いましたが。「見て来たぞブラックホールに架かる虹」。

長谷川 ブラックホールに架かる虹を何かに変えたい